

## 新時代研究とカント<sup>(1)</sup>

ヴァルター・フアルク  
竹中克英 著  
訳

まえがき<sup>(2)</sup>

本論文は歴史におけるファクターX<sup>(3)</sup>の同定について計画された著書のための準備から生まれた断片的構想である。一九七七年執筆されたが、これまで未発表である。

\*

トーマス・S・クーン<sup>(4)</sup>、ミッシェル・フーコー<sup>(5)</sup>、アウグスト・ニチュケ<sup>(6)</sup>などの研究者たちが六〇年代にたどり着いた洞察によれば、歴史の質的刷新は連続的過程で起こるのではなく、飛躍という形で起こる、それゆえに、科学(学問)はその刷新をその時々を先行する状況から導き出すことができない。この洞察の具体的実例は一七七〇年以降に一連の生活領域において証明された転換である。この原因についてはこれまで明らかにされていない。しかし、原因が人間的活動の外にあることは確実に

ある。このことを承認することは世界観的理由から困難かもしれない。科学理論的観点からは、しかし、ただひとつ重大な反論が存在するように思われる。カントによれば、人間は時間的変化を、その時々のもつと後の状態がある一定の作用因の結果現象として証明されるのでなければ、客観的な仕方では把握することはできない。このテーゼは、時間は人間の主観の外には存在しないとの前提に基づいている。だが、これは誤っている。カントはこのテーゼを、人類の進歩は人類自身の所産でなければならぬ、という世界観上の絶対要求から導き出したのである。彼が構想した進歩のモデルはそれ自身において矛盾をきたしているために、これを学問的に維持することはできない。

\*

この草稿の執筆に先立って著書『構造主義から潜在主義へ』<sup>(7)</sup>が執筆され発表された。その中でわたしは、新時代研究のさま

さまざまな代表者たちの認識によって達成された学問的状況を記述しようとした。本草稿はこの著書の補遺として企図されたものである。だが、カントの時間解釈に対する批判を通して、草稿は新たな時間解釈にとどまらず、時代的転換の原因理解に達しようとの試みをも準備したのである。

### 一、新時代研究は非合理であるか？

新時代研究 *Neue Epochenforschung* の洞察は学問の世界で一般に承認されるにはまだはるかにほど遠い。トーマス・S・クーンの著書『科学革命の構造』(Kuhn, 1962)<sup>(5)</sup>を読めば、このことを不思議に思う者はいないだろう。それどころかクーンは、科学的刷新が過去に、しかも古い価値を擁護しようとする研究上の敵対者においてだけでなく、自ら進歩に奉仕していると信じそれなりに実際にも進歩を促進してきた科学の代表者たちにおいてこそ、浸透することがいかに困難だったかを明らかにした。自然科学における重要な進歩は連続的かつ制御可能な仕方では遂行されるのではなく、その時々が存在する研究史的状況からは正当化することのできない突発的飛躍という形で起こる、という彼自身の基本テーゼに関していうならば、クーンの立場はけっして容易なものでなかった。たしかにそのテーゼは厳しく学問的に断罪され黙殺されたわけではなく、逆にかかなり密度の高い学問的議論を国際的に引き起こすことができた。し

かし、この議論では、彼は非合理に墮し科学を非合理的な企てとして弾劾している、との非難がしばしばクーンに対して持ち上がったのである。従って、クーンに抗して合理性と科学とを防御しなければならぬと考えた学者たちも少なくなかった。

クーンはその間に、自分がこれまで看過されてきた自然科学の歴史に見られる一定の実態を真剣に取り上げ、それらの意味を問題にしたとき、自分のとった態度は完全に科学的だったと思っている、と強く強調した。さらにまた、科学と合理性とは符合不離であるというのが自分の見解だ、と。「全体的に見れば」と彼は一九七一年に書いている、「科学的態度とは合理性についてわれわれが手にしている最良の例である」(Kuhn, 1974, S. 130)<sup>(6)</sup>。もっとも、彼がこの見解を主張できたのは、同時に彼が合理性という概念の修正を求めたからにはほかならなかった。

「もし歴史が、あるいは何かほかの経験的学問分野がわれわれをして、科学の発展は本質的にわれわれが以前には非合理だとみなしていた態度に立脚していることを確信させてくれるとするならば、そこからわれわれが引き出すべき結論は、科学は非合理だということではなく、合理性というわれわれの概念がさまざまな箇所ですらに即して修正されなければならないということである」(Kuhn, 1974, S. 130)。

この要請に従うのはまさに経験を積んだ学者にとってこそ容易でない。それは概念の修正を要求するだけでなく、自分自身

の精神的な生活の変更をも要求する。なぜなら、もし合理性という概念を新たに捉えなおすべきだとすれば、学問の本質についての表象もまた変更せざるをえず、しかも、学問はいかなる研究者にとつても個人的な生活空間だからである。したがって、ヴォルフガング・シュテックミュラー<sup>(10)</sup>が一九七四年に、「科学革命についてのクーンの論文は今日の科学理論に対して存在する最大の挑戦を表している」(Segmüller, 1974, S. 167)<sup>(11)</sup>、そして、それは「彼について一応の知識を得たほとんどの哲学者を一言もないほど驚愕させたのである」(Segmüller, 1974, S. 167)、との考えを述べたのも偶然ではなかった。

クーンが引き起こした驚愕がもつともだとしても、それによつて科学にとつて得られたものはまだ何ひとつない、と真剣に異議を唱える科学者はいないだろう。重要なのは、クーンのテーゼを綿密に調べ、必要ならば、たとえ気が重くなることがあるかもしれないとしても、それを受け入れる覚悟をすることだろう。シュテックミュラーは最良の科学的伝統とその見解を同じくしながら、この道を進んだ科学理論家のひとりである。彼は、自分の認識によれば「クーンはその批判者たちに対してほとんどすべての本質的な点において正しい」と言明し、「問題はクーンの主要テーゼを何らかの仕方で否定したり、撲滅したり、克服したりすることではなく、「……」それを心に留め、論理的に消化することである」(Segmüller, 1974, S. 171)と強調した。

シュテックミュラーが定式化した課題を受け入れるには、まず何よりもクーンが語つたところの「非通常の科学」によつて媒介される画期的進歩のために新しいParadigm、すなわち、新しい根拠の発見に努めなければならないだろう。自分には進歩の原因を言うことはできない、と当初はあからさまに認めたクーンだったが、彼としてもこの課題を避けることはできなかった。科学革命についての自分の著書の考えを取り上げて、彼は、質的飛躍の原因がこれまでにまだ知られていない科学共同体(「サイエンティフィック・コミュニティ」scientific communities)の独自性にあるかもしれない、との推測を究明しようとした(Kuhn, 1970)<sup>(12)</sup>。この社会学的仮説は、衝動的な主要テーゼがしばしば反論と同時にきわめて肯定的な関心呼び起こすことに少なからず貢献したのである。その結果として、たとえば一九六二年の著書のドイツ語版がポケット版としても出版された。

だが、クーンの社会学的仮説こそはずっと以前に袋小路であることが証明されていた、しかも、なによりもまず一九六六年に出版されたミッシェル・フーコーの著書『言葉と物』<sup>(13)</sup>によつて。この著書も同じように、科学の質的進歩をその時々との状況からは導き出すことのできない飛躍として記述しているかぎりにおいて、たしかにクーンの主要テーゼの正当性を強く証明するものだった。しかし、飛躍の原因は同じ学問分野の研究者の共同体にあるかもしれないとの(クーンが推測した)可能

性は、ほぼ同じ時期に同じ種類の質的飛躍がまったく異なる学問分野（生物学、言語学、経済学）において起こったことが証明されることよって排除された。

上に挙げたフーコーの著書もまたたちまちにして有名になった。ただし、その当初の成功はおそらく主として誤解によるものだった。この著書が出版された時期にはレヴィ・ストロース流の構造主義がフランスにおける知的議論の中心にあり、——フーコーはドイツ語版の序文で不機嫌にも指摘しているのだが（Foucault, 1966, S. 15/18）<sup>(14)</sup>——著書はこの精神運動のさらなる宣言として迎えられた。構造主義は歴史的变化の原因についての問いを除外するが、そのことを別にしても、すでにきわめて厳密な、それゆえ、学問的に疑う余地のない方法であることが証明されたために、フーコーはクーンほどに非合理主義の非難を浴びることはなかった。しかし、彼から発する伝統的科学校に対する挑発はクーン以上に根本的だった。クーンを非難しようとするればフーコーをも告発せざるをえないだろう。

だが、フーコーもクーンと同じように、学問を否認したりみずからを学問の外部に位置づけるつもりはなかった。彼はクーン以上にいつそう断固として、科学の本質についてあまりにも独断的であまりにも意識的なものに集中しすぎているように思える伝統的表象を修正するために弁護したのである。彼は、偉大な学問的飛躍の原因は知の暗い無意識的な側面にある、と推測した。

「わたしが「……」達成しようとしたのは、知の積極的な無意識、すなわち、科学者の意識から滑り落ちながら、それにもかかわらず学問的言説の一部をなす領域を明らかにすることだった（Foucault, 1966, S. 11/12）。知のこの暗い側面を彼は「真理への意志」（Foucault, 1972, S. 12）<sup>(15)</sup>とも呼んだのである。

時代的転換の原因はこれまでまだ把握されていない探求精神 *der forschende Geist* の特性にあるかもしれない、との仮説もまた他方では維持できないことが明らかになった、とりわけ、すでに一九六七年に出版された一冊の著書<sup>(16)</sup>によつて。この著書によつてアウグスト・ニチュケは、いくつかの異質な学問に見られる並行的転換についてのフーコーのテーゼを印象的なしきたで証明するのに貢献した。というのも、彼はその中で、中世に自然理論および国家理論がほぼ同じ時期に同じ種類の基本構想の転換を経験したことを証明したからである。しかし、さらにニチュケは類似の転換が探求精神とは疎遠な生活領域において、つまり、社会行動というおよそ反省とは無縁な領域においても起こったことを証明したために、フーコーの推測はあまりに短絡的すぎることに明らかになった。

ニチュケの著書『中世における自然認識と政治的行動』（Nitsche, 1967）<sup>(17)</sup>が流行の潮流に乗って一般に受け入れられることはなかった。従つて、この著書はこれまで翻訳されたこともなければ、ポケット版シリーズに取り上げられることもなかった。しかしこの間に、科学史および社会史における並行的

転換についての彼の基本テーゼは確実だとみなすことができよう。たしかにそれはまだ決して歴史家たちの広いコンセンサスを得ていない。しかし、きわめて重要な諸々の確証が得られ、反駁の可能性はほとんどありえなくなつたのである。

ニチュケの分析の妥当性の証人として、わたしはまず第一に、たとえ一番重要とは言わないにしても、わたし自身の名を挙げてお許されるだろう。ニチュケの著書をまだ知らないまま、わたしは原初から中世盛期にいたるドイツ文学史の時代的連関を新たに規定しようと試みた、そして、わたしが得た結果は、その後明らかになつたように、ニチュケの認識と正確に一致するものだった (Falk, 1974)<sup>(18)</sup>。中世の学問史の分野ではヴォルフガング・シュテュルナー<sup>(19)</sup>が、すでにニチュケの研究を知つた上で徹底的な研究を行い、ニチュケの観察の妥当性を確認するにいたつた (Stürner, 1975)<sup>(20)</sup>。

基本テーゼの意義にとつてさらに重要だつたのは、その妥当性がニチュケがまず最初に集中的に研究した期間以外においても証明されたことである。これは特にフーコーが『言葉と物』でその中心においた転換過程に関して、すなわち一七七〇年頃以降に起こつたあの転換過程に関してなされた。フーコーによる記述は学問史の分野においてこの間に繰り返し点検され、証明された。その際に、ヨハネス・ブルクハルトは経済理論 (Burkhardt 1974 und 1975 a)<sup>(21)</sup> および歴史学に取り組み、ジークフリート・コッホは自然科学に (Koch, 1975)<sup>(22)</sup>、ヴォルフ・レペ

ニースはフーコーが考慮しなかつた各種の学問に (Lepenies, 1976)<sup>(23)</sup>、わたし自身はカントの認識論およびヘルダーの言語理論と歴史理論に (Falk, 1976)<sup>(24)</sup> 取り組んだ。フーコー自身もこの間に、この転換が決して探求精神の分野だけでなく「生活」領域においても起こつたことを認識した。一九七五年に出版された彼の著書『監視と処罰——監獄の誕生』<sup>(25)</sup> はとりわけ法制史の分野における類似の転換を明らかにした。同じ年にアウグスト・ニチュケは「産業革命における行動変化」について一冊の著書<sup>(26)</sup>を編み、その中でヨハネス・ブルクハルト、ゲルトルト・フィッシャー、そしてわたしは同じ転換のメルクマールを文学史において (Burkhardt, 1975 b, Fischer, 1975, Falk, 1975)<sup>(27)</sup>、ニチュケ自身は同じ観点から絵画史および憲法史において指摘し、ヘニング・アイヒベルクは一方では経済において、他方では体操や舞踊に現れる運動行動において同じ転換が確認されることを明らかにした (Eichberg, 1975 a und b)<sup>(30)</sup>。一九七六年に出版された著書においてわたしは、一七七〇年の文学史的飛躍を再度、しかも今度はいつそう詳細に扱い、その上イベリア地方の闘牛に見られる類似の過程を記述した (Falk, 1976)<sup>(31)</sup>。

ニチュケのテーゼによつて、一九六二年のクーンの著書以来存在する時代的転換の原因についての問いの未解決性は、まさに伝統的な学問概念に対するこれまでに例のない規模の挑発であることがわかる。まず最初にフーコーが記述した一八世紀最後の何十年かに起こつた時代的飛躍によつて歴史が質的転換の

領域として発見されてからは、ほとんどすべての学者の間では、そのような転換の原因がある種の人間の行為にあるのは確実だと考えられた。しかし、まさにその飛躍について、この考へには根拠がないと思われるような仕方である。舞踊の分野において転換はバリエルンおよびオーストリアで七〇年代に起こった、言語理論と歴史理論においては七〇年代はじめに旅行中のヘルダーにおいて（ファルク）、認識論においては一七七〇年以降に、自分の故郷ケーニヒスベルクを一度も離れたことのないカントにおいて、経済学においては一七五五年以降にスコットランドのアドム・スミスにおいて、闘牛においてはマドリッドにコステイラーレスが登場した同じ一七五五年に（ファルク）、憲法史においては一七七六年のアメリカ独立宣言とともに（ニチュケ）、生物学においては一七七七年にパリで出版されたラマルクの著書とともに（フリーコー）などである。いかなる種類の人間の活動によつてこのようなパノラマを説明することができるだろうか？

しばしば、歴史を作り時代の基礎を築いたのは偉大なる人物たちである、といった意見が主張された。その場合に、新しい時代の原因はそのつど、ある一定の創造的な力であると仮定された。この力にはときには主として政治的・意志的性質が、ときにはなによりも精神的・知的性質があるとされた。その力はひとりの偉大な個人によつて一定の生活領域で、自分自身を越

えて働くところの、従つて、他の人間に影響を及ぼすところの強力な所産を生み出すことによつて発揮された、と考えられたのである。

はじめは個人的な新しい世界の見方が影響過程で時代的な見方へと展開されるとの考へには、ここでそのすべてについて論ずることのできない一連の問題が含まれている。ただひとつの要因についてだけ強調しておくことにしよう。われわれの例において、イマヌエル・カントこそがその影響力によつて新しい持代を生み出した偉大な人物だとみなすならば、カントの思想が次第次第に広がつていったことを証明しただけではけつて十分ではないだろう。むしろ、どの程度カントがバリエルンやオーストリアの二、三の人々を鼓舞してワルツの創造を促したか、アンダルシアの闘牛士コステイラーレスをして闘牛の新技法の考案へと鼓舞したかをも明らかにしなければならぬだろう。このような課題を積極的に解決することが不可能なことを明確にするには、ただそれらを挙示するだけで十分である。

だが、ある特定の生活領域（例えば認識論の領域）からまったく性質の異なる領域（例えば舞踊とか闘牛）へどのように影響力が働くのかを納得させることができたとしても、カントを先にあげたすべての刷新（および、ここでは同時にあげなかつたその他の多くの刷新）を最終的に引き起こしたところのあの個人だと証明することは相変わらず不可能であろう。なぜなら、カントが実際に多大な影響力——たとえその影響力が舞踊

家や闘牛士に対して及ぶことはおそらくほとんどなかったとしても——を獲得した著作『純粹理性批判』が出版されたのは一七八一年になってからだったからである。そのときまでにカントの新しい表象は、それらが一七七〇年の学位論文においてとつた形態を通して働きかけることができたにすぎない。だが、この論文はラテン語で書かれていたために、きわめてわずかな読者しか得ることができなかった。ほとんど確實とも言える蓋然性をもって、ワルツの考案者も闘牛士コステイラーレスもその論文を知らなかったと仮定できる。

カントに代わって誰か他の重要人物を一七七〇年の時代の創始者として立てようとすれば、原理的には同じ不可能に對峙することになる。個々の人間の個人的活動がきわめて短い期間にその種類をまったく異にする生活領域において、しかも、たがいに遠く隔たつた国々において現われた転換を引き起こしたなどということはありえない。

個人的活動と並んで、時代転換の原因としてはしばしば集団的活動が措定された。しかし、この考えを主張する人々は、いかなる種類の集団的活動がはたしてほんとうに決定的であるのかという点で意見の一致を見ることができなかった。ある者は政治的活動を、ほかの者は経済的活動を優先した。ところで、ここにあげた一七七〇年以降に始まつた転換の例はこうした論争が不要であることを示している。問題となつている時期にプロイセンにおいてだけでなく北アメリカ、スペイン、スコット

ランド、バイエルン、オーストリアやフランスにおいても影響力を持つた政治的事件や経済的事件、あるいはそのほかの社会史的事件などは存在しなかった。そして、たとえそのような事件が起こつたとしても、それがどのようにして上に挙げた国々で同じ影響力を及ぼすことができたかを知ることができないだろう。なぜなら、現実には存在しなかったその事件が直面したであろう政治的および経済的状况は、これらの国々においてその当時非常に異なつていたからである。最後にまた、もしそうした事件が存在したとしても、それが認識論の新しい考えにおいてだけでなく、新しい舞踊法や闘牛との取り組みの別の方法などなどとして影響力を及ぼすことができたかを決して理解することはできないだろう。

人間の個人的活動にしろ集団的活動にしろ、それらのいずれもが一七七〇年前後に起こつた時代転換を引き起こしたとは考えられない。この結論は新時代研究が明らかにしたパノラマから必然的に導き出される。しかし、だからといって転換がおのずから、何らかの原因なしに起こつたとも考えられない。従つてさらに、未知の原因すなわちファクターXは人間の活動の外にあると必然的に結論せざるをえない。

すでにクーンの観察が非合理主義の誇りを招いたとするなら、一五年を経てこの間になされた新時代研究のさらなる観察のいくつかを視野において定式化されるこの確認もほとんど非合理主義の誇りを免れない。しかし、そうした非難はいつた

何に根拠を置いているのだろうか？ テーゼが親しみに欠けるというだけでなく、よく知られている学問的表象に鋭く対立してもいるという事情から、なるほど不機嫌な感情を抱くのもつともだが、しかし、だからといってそれがけつして学問的論拠になるわけではない。もし非合理主義だという非難が合理的性格を持つとすれば、上に挙げた新時代研究の経験的観察が誤りであることを証明する調査の結果として主張される場合にかぎられる。なぜなら、いまこれらの観察から引き出された結論はほとんど批判の余地のないものだからである。それらの帰結は、その前提が妥当だとすれば、思惟の必然である。

誰もがここで立てられたテーゼの経験的基礎を検証し、その反証を得るべく努めるようにと誘われている。反証に成功しなにかぎり、非合理主義の非難は客観的に正当ではないだろう。にもかかわらずそうした非難がなされるとすれば、情緒的不安以外にほかに何も表現するものがないことを正直に告白しなければならぬだろう。

経験的反証が成功する可能性は、わたしの見るかぎり、きわめて少ない。もつとも優れた一八世紀についての識者であるラインハルト・コゼレックは、最近、新時代研究の特別な問題提起を受け入れることなく、この世紀の末ごろに広範囲にわたって意識変化があったことを確認した。彼によってなされた記述は新時代研究の代表者たちが展開した記述と相当程度において一致している。その上、これまでわたしが引き合いに出した新

時代研究の著述に関して、わたしの知るかぎり、種々の生活領域における転換の叙述が間違っていると主張されたこともなかった。そして最後に、新時代研究が転換の現われだとした諸々の現象は、なるほどそれぞれ同じ生活領域のそれ以前の諸現象についてに限ってではあるが、多くのケースですでに伝統的研究によってもその新種性が認識されていたのである。従って、それぞれの専門家の間では、カントが一七七〇年の学位論文および七〇年代に仕上げた『純粹理性批判』によって認識論に革命をもたらしたと、ヘルダーが疾風怒濤時代に言語および歴史の新たな構想を立てたこと、アダム・スミスが彼の有名な一七七五年の著作において国民経済をその頃まで未知の観点から記述したこと、コステイラーレスが闘牛の基礎となる新しい殺害技法を案出したこと、アメリカ独立宣言が政治理論と実践のために完全に新しい地平を開いたことなどはとつくに知られていた。新時代研究の業績の大部分は、一方ではこれまでの時代規定を厳密にしたことに、他方では性質が極めて異なる生活領域に妥当する時代的メルクマールを獲得したことにのみある。おそらく現在ある時代規定は将来さらに厳密に捉えられることになる、しかし、それがまったくの間違いであることが証明されるとはわたしには想像できない。

それにもかかわらず、七〇年代の大転換のパノラマから導かれるテーゼを完全に確実だとみなすのはなお時期尚早だろう。なぜなら、学問的議論において経験的知識がいかに重要である



うとも、つねに決定的な意味が与えられるのはなんといつても理論だからである。学問的誤謬のいくつかは理論的諸連関の枠内ではじめて認識可能になる。いまのケースにおいて重大な理論的反論を考慮に入れることができるだろうか？

## 二、カント認識論からの反論

ファクターXが人間の活動の彼岸領域から歴史に働きかけ、そこにおいて時代の転換を引き起こすというテーゼは、通常の考えと決定的に矛盾する。それゆえ、一般的な種類のさまざまな反論が期待される。それらすべてを先取りし、すでにいまのうちから考慮に入れておくことはほとんど不可能である。しかし、そうした反論について議論することも全然必要ないだろう。なぜなら、理論的反証は、それがテーゼに含まれている前提もしくはそれらのひとつでも危うくする場合にのみ重大と言えるだろう。しかし、学問の歴史はしばしば、格別手っ取り早く用意される反論が不十分なものであることを示してきた。いまの場合ひとつの例として、問題になつてくるテーゼはアウグスチヌスからボシュエ<sup>(33)</sup>にいたるまで再三主張され、その理論的反論のための特別な努力は二〇〇年以上も前からすでに存在するがゆえに余計なものであるところのかの歴史神学的思弁のひとつのヴァリエーションにすぎない、とする主張である。一見するとこの主張は、歴史神学においてもここで立てられたテー

ゼにおいても人間を超える歴史の力という思想が中心的な意味を持つがゆえに、なるほど示唆に富んでいるように見える。しかしながら、それは誤りであり、誤解を招くことになる。歴史神学においては自明のこととして、超人的な歴史の力は神と同一であると前提された。ここで主張されているテーゼで問題にされているファクターXについては、その同定はまだなされていない。だが、たとえ同定の試みの結果がどのように終わろうとも——超人的な種類の歴史の力として、神以外に例えば自然、あるいは人間本性、あるいはそのほかの力が考えられよう——、従つて、歴史の力にはかつての歴史神学とはいまやまったく別の機能が与えられることは最初から確実である。そのほかに、一八世紀にたどり着いた歴史神学の反駁は、いま問題としている諸問題とはそもそも何の関係もない。かの反駁は、実際、最終的なものである。ライプニッツが神を完全状態における理性として定義し、この神によって創造された世界はあらゆる可能な世界のうちで最良のものでなければならぬというところが彼によって明らかにされた後では、それに続いてヴォルテールが神よつて始動された人類の発展は理性の諸法則に導かれ、それゆえ、その後の補足的な神の介入など容認できないと主張したとしても、それはただ論理的にということにすぎなかつた。ファクターXについてのテーゼには、歴史が完全な理性によつて始動されたなどという前提はけつして含まれていない、従つて、ヴォルテールの推論は、いかにそれ自身の前

提が正しいとしても、ここでは通用しない。

わたしに思い浮かぶ理論的反論として考えられるもののうちただひとつだけが実際に重大であるように思われる。その反論はカントの認識論から導き出されよう。

この認識論によれば、空間と時間は客観的与件ではなく、ただ人間が活動するときのみ現出する人間的直観の形式である。ただし、その場合にはつねに人間は事物を、それらが空間と時間の枠内でとる仕方ではしか認識することができない。そこでいま次のように主張することもできよう。すなわち、ファクターXの場所は人間的活動の彼岸にあり、同時にそれは空間と時間の彼岸の場所である、それゆえに、ファクターXの同定についての問いにはついに答えられないまま終わらざるをえない、と。なぜなら、カントの意味においてファクターXはたしかに物自体であり、従って、人間の認識の及ばない物だからである。この事態は、時間における諸々の変化は、ある一定の現象が作用として解釈され、その原因たる別の現象に還元されることによつてのみ合理的に捉えることができる、というカントの第二の認識論的テーゼと結びついて重要な帰結をもたらさるろう。このテーゼによれば、変化の原因として命名することのできない時間的変化についての、ということは特にまた歴史的变化についてのあらゆる言説は非合理とみなさざるを得ない。新時代研究はこれまでそれが記述した時代史的变化の原因を決して命名することができなかった。なぜなら、この原因がファ

クターXと呼ばれたとしても、それは命名されたことにはならず、命名することが当面不可能であると告白されたことだからである。したがって、「もしそうであるとするなら、」新時代研究の観察は最初から非合理的だったのであり、それをいつか合理的なものに変える可能性は全然ない。それらが経験的にまだどれほど明白なものに見えようとも、理論的にはすでに反駁されているということになる。

先に言及した反論とは違って、いま略述した反論を不適切だと退けることはできない。ファクターXが人間的活動領域の彼岸に位置づけられたために、それはまちがいがなくカントが物自体に関して述べた断罪にさらされる。従って、ここで主張されたテーゼは、この断罪が不当に宣告されたものだということを証明できなければ、維持することができない。

人間の思考方式に根ざす一方では空間の、他方では時間の主観的性格をカントが明らかにしたときの思考過程は、その性質を非常に異にしている、従って、それぞれをそれ自身として検証しなければならぬ。

空間を規定するにあたってカントは具体的な空間的事物の表象を出発点とした。これによつて彼は、空間を非事物的な仕方ではテーマとして扱うことができる可能性を検討することなしに削除した。このことが正しかったかどうかは疑わしい。ただし、日常的経験において空間は事物において現われることを認めざるをえない。その上また、カントが空間的事物、例えばいま

る部屋を感覚的に知覚することができるという可能性から、空間そのものは客観的に、つまり思惟する主体から独立して存在する、と結論することはできないと表明したとき、彼の言うことは正しかったと認めざるをえない。われわれが事物を空間的なものとして考えるとき、この第一の事物を空間的に包摂する第二の事物に、したがって、例えば部屋を家に関係づける。第二の事物においても同じプロセスが繰り返され、第三の事物においても同様であるが、最後には巨大な容器のように他のいっさいの事物を包摂するといわなければならないひとつの空間的事物にたどり着く。これについて、いま、それは空間そのものであると考えたくなる。しかし、それをさらに広い空間的事物にこれ以上関係づけることはできないから、まさにこの事物を空間的に考えることはもはやできない。かくして、実際には空間そのものは事物的・客観的に実存するのではなく、つねに主観の思惟を通してはじめて生み出されることが証明される。事物は非空間的な仕方、そのかぎりでは物自体としては考えられない、との結論は依然として説得的である。それをひとつの実例を用いて簡単に説明することができる。空間的に延長された事物とはひとつの文書でもありえる。(文書がふつうは空間の三つの次元すべてではなく、そのうちのただ二つしか必要としない、という事情は理論的には意味を持たない、しかし、この例を単純化するのに役に立つ。)ところで、文書は、読者がそれを理解するためには、左上から始め、文字を右端まで追

かけ、それから一行下がって新たに始めなければならない、というように配置されている。これは西洋では自明とも思える秩序である、しかし、右上、左下、右下から始めるといった別の秩序を適用することもできる。しかも、さまざまな秩序体系が象形文字文書のようにオーバーラップし、事情によっては左からでも右からでも、つまり、つねに中心の神の名にむかつて配置されることも可能である。しかし、考えうるすべての配置がただひとつの具体的なものに包括され、そのことによつて物自体がその文字の配置から生ずることはありえない。どの具体的な配置も他の配置を事物的実現から排除する。物自体はわれわれにとつて表象不可能である。

事物的空間の主観性と空間的な物自体の認識不可能性についてのカントのテーゼは今日においてもまだ承認せざるを得ないとしても、それだけではファクターXについてのテーゼに対する上に素描した反論はまだその正当性を証明されたわけではない。なぜなら、ファクターXがそのテーゼから求められているのは、空間的連関ではなく時間的連関という点においてであるからである。従つて、カントのテーゼについてと同じように、時間もまたつねにまず人間の主観によつて生み出されることが検証されなければならない。

一見して、このテーゼは事物的空間の主観性についてのテーゼと同じように、あるいはそれ以上に確固としているように見える。われわれにとつて事物は感性的知覚においてはつねに空

間的物として現われるのに対して、われわれの感覚にその時間性という性格が現れることは決してない。事物の時間連関が明らかになるのは、われわれの構想力 *Einbildungskraft* が活動するときのみである。カントの言葉を用いるなら、「諸現象は交互に継起するということ、すなわち、諸物のある状態がある時間において存在し、それ以前の状態においてはその状態の反対が存在したということを私は知覚する。それゆえ、私はもともと時間のうちにある二つの知覚を連結するのである。ところで、連結は単なる感覚や直観の仕事ではなく、ここでは内的感官を時間関係に関して規定する構想力の総合的能力の産物である。」(Kant, 1956, S. 226) (二八九頁)<sup>34</sup>。時間の主観性はこの容易に洞察することができる実態によってすでに証明されているのではないだろうか？

カントは時間の主観性およびその客観的非在を強く強調した。「時間は内的感官の形式、すなわち、われわれ自身とわれわれの内的状態を直観する形式に他ならない。というのは、時間は外的現象のいかなる規定でもありえないからである。時間は形態や状態等々には属さない。これに対して、時間はわれわれの内的状態における表象の関係を規定する。」(Kant, 1956, S. 80-81) (一一〇頁)「したがって、時間は、もっぱら、われわれの〈人間的〉直観「……」の主観的制約であり、それ自体としては、主観の外においては無である。(Kant, 1956, S. 82) (一一一頁)

だが、カントが時間を人間的構想力の産物として記述するだけで満足していたら、主観性の概念は時間については空間についてとはまったく異なる内容になっただろう。空間的なものは不変的なものという性格を持つ。それが主観によって生み出されるとするならば、つねに同じ仕方である。それゆえ、その人間的考えに基づいて空間を生み出す個人はすべて、その個人的相違にもかかわらず、同じ空間に存在している。時間の本質のひとつは、これに対して、変転をもたらすことにある。完全に互いに一致するような二つの時間的狀況は存在しない。人間としての個人がその構想力によって時間を生み出すとすれば、その時に生ずるのは無数の個の共通領域ではなく無連関なカオスである。このカオスに注目するなら、国家という公的機関の存在も時間的出来事についての学である歴史学の存在も説明することはできない。

この困難はカントにとつて、時間はもしかしたら客観的諸連関に支えられているのではないだろうか、と問う契機になりえただろう。しかし彼は、個人の時間産出のカオスを秩序づけることのできる、人間に固有の精神力をあくまで探そうとした。そして、そのような精神力は実際に発見することができる。主張したのである。人間の悟性はその時々々の状況とは無関係な普遍的概念を用いることによって必要とされる秩序を生むことができる。秩序をもたらすこの概念とは原因と結果という概念である、と。

「ところで、この客観的關係が規定されたものとして認識されるためには、二つの状態の間の關係が次のように思惟されなければならない。すなわち、二つの状態のうちどちらかが前に、どちらかが後に定立されねばならず、決して逆に定立されてはならないということが、その關係によつて必然的なものとして規定されるように、思惟されねばならないのである。しかし、総合的統一の必然性を伴っている概念は、知覚のうちにはない純粹悟性概念でしかありえない。そして、それは、ここでは原因と結果の關係の概念である。それらのうち、原因は結果を時間のうちに帰結として規定するのであつて、単に構想のうちで先行しうるのであろう（あるいはおよそどこにも知覚されていることができないであろう）或るものとして規定するのではない。それゆえ、われわれが諸現象の繼起を、従つてすべての変化を原因性の法則に従属させることによつてのみ、経験、すなわち、諸現象についての經驗的認識でさえも可能なのである。したがつて、經驗の諸対象としての諸現象そのものはただまさにその法則にしたがつてのみ可能である。」(Kant, 1956, S. 227) (二八九―二九〇頁)。

上に挙げた文はカントの時間理論を要約し、それによつて、この理論に基づいて新時代研究に対して主張される根本的な反論をいまいちど明確にする。伝統的学問全体はその理論的基礎をカントから引き継いでいるがゆえに、それは伝統的学問全体からなされるであろう反論である。この反論を次のように定式

化することができる。すなわち、時間現象が因果律に即して考察されることによつてのみひとつの変化が認識されるのであるから、新時代研究の代表者たちが報告している観察のどれひとつとして經驗的認識とみなすことはできない、なぜなら、いかなるケースにおいても新種のと記述された現象がひとつの原因に帰されることはなかったからである。従つて、新時代研究のすべての著書は、一般的概念を指針とするのではなく、彼らの個人的な構想力に導かれた似非学者によつて書かれたものである。従つてまた、フアクターXについてのテーゼにまともに対応する契機も全然ない。なぜなら、時間はつねにまず人間の活動によつて生じるものであるから、時間的な出来事を引き起こすことができるのはけつして人間外的な働きではなく、唯一人間自身のみであることは明らかだからである。

この反論をカントの威信とともに二百年にわたる学問的伝統が支持している。にもかかわらず、それが誤りであることをここで証明しておこう。当然その場合に、カントの時間論はまったくの誤りであるなどと主張するつもりはない。もしその理論が真理の核心を含んでいるのでなければ、これほどにも深い長期にわたる影響力を行使できなかったことはたしかである。おそらく、カントの理論はその説得力を、個々の事物はそれが感性的知覚に現われる仕方ではその時間的關係についていかなる情報ももたらさない、という特にその理論のアプローチから得ている。この理論を打ち倒すことは不可能に見える。それゆえ

にまた、カントのその次の思想、すなわち、時間は個々の事物を越えて別の事物とのその関係を問題にするときにのみ視野に入ってくるという思想は依然として納得できる。最後にまた、因果関係とは以前のものと以後のものとの違いを鮮明に浮かび上がらせる関係である、というのも疑問の余地はない。しかし、決定的な異議申し立てがなされるのは、因果関係が時間認識にとって唯一重要な関係であるという主張に対してである。

この主張を維持できるのは、せいぜい事物がわれわれに通常その物に固有の連関の外において可視的となる場合である。例えば、荒野の砂の中に一個のリングゴを見つけたときには、しばしばこれは完全に妥当する。そのような非通常の観察においてわれわれの関心を引くのは、実際にはほとんど事物の状態とその原因との関係だけであると言える。誰もしくは何が働いて、と例えば誰もが問うことだろう、リングゴは荒野の砂の中に落ちたのか、と。だが、一個のリングゴが木の枝にあるのを見たときには、まったく別の状況におかれる。そのリングゴとともにその木が、そのほかに別の木々、茂み、ほかの植物が、そしていたるところに果実が知覚される。その一個のリングゴに遭遇するのは実のたわわになる風景、すなわち秋という包括的なシステムの内においてである。

この例は通常の場合のわれわれの経験の仕方を代表している。われわれは事物を通常孤立的にその単なる感性的連関において知覚するのではなく、それらに対応するところのシステム

としての性格を備えた連関において知覚する。したがって、時間的に異なる事物の状態についての問いは、ふつうは異なるシステムについての問いである。しかし、システムはいかなる場合にも——感性的に知覚された個々の事物と違って——時間的に異なる他のシステムへの示唆を含んでいる。この示唆をわれわれは子供のときから正しく解釈することを学ぶ。各人は果実のたわわになる風景にあつては、花咲き乱れていた時間的に以前のシステムをさかのぼって示唆するメルクマールに注目するだろう。システム「秋」とシステム「春」との相違はわれわれの眼前に非常にはつきりと現れる。その際に因と果を問う必要性は存在しない。

因果的時間思考は、せいぜいのところ漠然たる形式での人類の共有財産でしかない。厳密な形でそれが重要性を持つに至ったのは西洋文化に至つてであり、ことにカント以降になつてからである。しかし、あらゆる文化において人間はみずからの進むべき方向を時間的に定めることができた。われわれの文化においても、まだ因果的思考能力のない子供たちでさえ、以前と以後とを完全に区別することができる。システムに関わる時間思考はまぎれもなく人間の基本的仕組みに属しているのである。

この時間思考は論理的には因果的時間思考よりも本源的である。なぜなら、以前と以後とが存在することがすでに知られていてはじめて、原因と結果について問うことができるからであ

る。ある程度までカントもこのことを認めていた。彼は因果思考に別の時間規定を、つまり構想力によって生み出される時間規定を先行させた。だが、彼は前・因果的 *praktisch* 時間規定が客観的な実態に関係していることを承認する覚悟はなかった。しかし、これは間違いなくそのとおりである。すなわち、春と秋といった時間的システムは、人間の構想力によって生み出されるのではなく、客観的に存在するものとして発見される。それらは人間のいない世界においても存在しうるだろう。実際にそれらは動物によっても知覚される、しかも、しばしば人間の知覚が遠く及ばないメルクマールにおいて知覚されるのである。

カントの時間論は、一方では因果連関を超えた明確な時間認識の可能性を否定し、他方では客観的時間の存在を否定するかぎりにおいて、二つの基本的な誤謬を含んでいる。最初にあげた誤謬を認識することによって、新時代研究の因果的方法に対してなされる根本的反論は崩れる。第二の誤謬を明らかにすることによって、人間の主観の彼岸において作用する歴史の力の論究に対してなされる反論はその基盤を失う。従って、カントの時間構想から導き出されるところの、新時代研究およびファクターXのテーゼに反対する理論的論拠が実際に外見どおりに唯一重要な論拠だとするならば、理論的な種類の重大な反論はもはや存在しないことが確認できよう。

このことを確認しておけば、新時代研究の認識によって明ら

かになったあの新しい諸問題に、さらにはファクターXの同一性についての緊急の問いに直接向かうことも可能だと考えられるかもしれない。しかし、思惟を通して処女地に踏み込もうとする試みがすべてそうであるように、この試みも学問的伝統への回帰的連関なしには成し遂げられないだろう。だが、そのような連関を打ち立てることは、いまのケースでは困難だろう。

一八世紀の最後の三半期まで歴史との学問的取り組みを支配したのは、人類における変化は永遠的な基準との関係から解釈されなければならないという考えだった。ヘルダーが歴史的人間にとって永遠的基準など決して存在したことはなかったし、これからも存在することはありえないだろうということを見出して以来、この考えは廃れた。それゆえ——そして、その限りにおいて——ヘルダー以前の歴史思考の伝統との肯定的連関を打ち立てることはもはやできない。肯定的連関にとつて疑問に付されたのはただ最近二百年間の伝統にすぎない。だが、この時期に歴史的学問は今日に至ってもなお反駁されていないヘルダーの基本テーゼに導かれたばかりでなく、カントが与えた時間解釈にも広範囲にわたって導かれたのである。かくして、カントの誤謬は最近二百年の歴史思考に入り込んだものであると考えてほばまちがいないだろう。

もしそうであるとするならば、このことは当然必ずしもこの伝統が今日では無価値であるということの意味しないだろう。カントの理論は決して完全に誤っていたわけではなく、それに依

抛する者はたしかに多くの真実を発見し提示することができる。しかし、この真実を利用することができるためには、それが全体的な陳述のどの領域において期待できるかを知らなければならぬ。これを究明することができると思えば、おそらくカントの誤謬に感染した領域をできるかぎり明確に限定することによってであろう。この課題を引き受けることによって、伝統的な歴史科学を根本的に批判することになる。

### 三、カントの解放的歴史モデルにおける矛盾

カントの——そしておそらくは彼に端を発する学問の——根本的欠陥は客観的時間の存在を否定したところにあった。というのは、合理的な時間連関を因果的時間連関に限定するという第二の本質的欠陥は第一の欠陥の必然的現象だったからである。それゆえに、何がカントをして時間を人間の活動に結びつけようと思えたかを明らかにすることがとくに重要だと思われる。

これについてはいくつかの推測が成り立つ。だが、わたしが考えるに、一義的な情報はカントが『純粹理性批判』を発表して二、三年後、つまり一七八六年に『人間の歴史の始元についての諸々の憶測』<sup>(35)</sup>の表題で印刷に付した論文から得られる。この論文は、一七八四年に出版されたヘルダーの『人類の歴史の哲学のための理念』<sup>(36)</sup>の第一巻をカントが読み、ヘルダーが明ら

かにした歴史過程における人間の質的転換をいかにして哲学的に捉えることができるかという問題に取り組んだ一連の小論文のひとつである。上に挙げた論文において、カントは楽園と墮罪についての聖書の物語に依拠し、認識の樹の実を食べることによって生じた最初の質的変化を例にとつてかの歴史の進歩の基本的特徴を明らかにすべく、この物語をそのモデルのための素材として用いたのである。

ところで、わたしの理解によれば、このモデルにはなぜカントが客観的時間を認めないかという問いにとつて参考になるひとつの矛盾が含まれている。わたしはすでにかつて、つまり著書『構造主義から潜在主義へ』<sup>(37)</sup>において、この矛盾を明らかにしようと試みた。しかし、これはすべての読者に理解できるような仕方では成功しなかったようだ。少なくともわたしの批評家エックハルト・ノルト・ホーフエンがそれについて報告しているが、そこではわたしが言おうとしたことをわたし自身でさえわずかしか再認することができない。

「ファルクによれば、墮罪はカントの墮罪解釈でもって始まった。ここで著者は純粹理性批判の著者の重大な思惟のあまりを指摘している。すなわち、カントおよびシラーによれば、楽園のアダムは一方ではあらゆる人間の特性を備えたまったく品行方正にかつ完璧な模範だったが、墮罪のときにはじめて彼の自由を用いたのだという。カントの言葉で言うなら、これは「……」単なる動物的被造物の未開性から人間性への移



行』だった。

もし——と、ファルクは鋭く結論する——禁断の実を味わってはじめて、そのことが動物から人間を、そして無辜の者から罪人を生み出すのだとするならば、自由な罪人を罪なき自由人へ解放しようとするのは理に合わない。

この矛盾した対立構造、すなわち、人間にして自由な罪人であるか——それとも不自由ではあるがそのときには動物であるかという対立構造から、ファルクにとつては、ひとりの自由な人間を解放しようとする、すなわち罪なきものにしようとする者はすべて、本当は人間についての理論ではなく人間⇨動物についての、すなわちケンタウロスについての理論を追求する者だとの弾劾が帰結される。——奇妙な解放概念である。」(Northofen, 1977, s. 19)<sup>(38)</sup>

わたしがカントのモデルとの連関で解放Emanzipationという概念を導入した、とノルトホーフェンが言うのは正しい。しかし、どういう意味でこの概念が導入されたかは、わたしがそのモデルについてのわたしのテーゼをわたし自身の理解に即して要約しないかぎり、おそらく明確にならないだろう。

カントはこのモデルにおいて二つの状態を記述した、すなわち楽園での存在によって状態Aを、善悪の認識の樹を食べることによって状態Bを。その場合に、AからBへの移行——と同時に、質的変化——がどのようにして起こったかが説明されなければならなかった。この説明のために、カントには初期状態

Aについて二つの記述が必要になったのである。

#### 記述Iによる状態A ..

楽園における生きものとは人間の本質的な特性のすべてを備えた、とりわけ発話能力・思考能力を備えた人間だった。典拠：「わたしはこの夫婦を、猛獣の襲撃から護られていて、暮らしの糧のすべてが自然によって豊かに提供されているような場所に置くことにしよう。いわば、つねに温暖な地の園である。そのうえでさらにわたしは、この夫婦が自分のさまざまな力を用いる熟練の点で、すでに大きな一歩を踏み出したあとの状態だけを考察することにする。つまり、その自然本性が完全に未開な状態を始元とはしない。「……」それゆえ、最初の人間は直立して歩行することができたし、話すことができたし(モーセ第一書、第二章、第二〇節)、それどころか論じること、すなわち関連しあう諸概念にしたがって話すこともできた(第二三節)。つまり、考えることができたのである」(Kant, 1964, s. 868f.) (九六・九七頁)<sup>(39)</sup>

#### 記述IIによる状態A ..

楽園における生きものは、まだ人間ではなく、本能に完全に従属し、理性的な思考能力のない、それゆえ本質的には不自由な動物だった。典拠：「人間の歴史の第一期に関する上記の叙述から明らかなように、「……」楽園から、人間が外に出たことは、

単なる動物的な被造物の未開性から人間性への移行であり、本能の歩行器から理性の指導への移行であり、一言でいえば、自然の後見から自由の状態への移行にほかならなかった」(Kant, 1964, S. 92) (一〇三頁)。

わたしの見るかぎり、楽園の生きものは完全な人間であり動物ではない(Ⅰ)とする陳述と、それは動物ではあるが人間ではなかった(Ⅱ)とする陳述とを、ノルトホーフエンが示唆したように(もちろん、彼は具体的な解決策を示唆することさえなかった)何らかの知的操作によって宥和する可能性はない。二つの陳述はモデルの同じ状態Aについてなされたものだが、私見によれば、明らかに矛盾を呈し、それによって人間を半身半獣に歪める重大な思惟のあやまりを表している。カントのような(当然わたしの考えからしても)偉大な西洋の思想家のひとりがこの陳述を行ったという事情は、客観的な契機に欠けているために、この見解を修正するきっかけにはならないが、どうして思考のあやまりを犯すことになったのかと問うきっかけにはなるだろう。知性の不足が原因だとする可能性は——この点ではカントに対するわたしの尊敬の念はまだ働いている——はじめから問題にならない。かくして説明の手がかりとしては、カントがある特定の意志に導かれて思惟のあやまりを犯したのだと推測するほかない。何をカントは求めたのか？  
モデルを構想するにあたってカントを導いた意志が何だった

かは、彼が状態Aだけでなく同時に状態Bをも記述している、従って、プロセス全体を要約している典拠Ⅱから見て取ることが出来る。二つの状態を特徴づけるにあたって彼は次のような対立を用いた。

状態A (典拠Ⅱ)

状態B (典拠Ⅱ)

「単なる動物的な被造物の未開性」——「人間性」  
「本能の歩行器」——「理性の指導」  
「自然の後見」——「自由の状態」

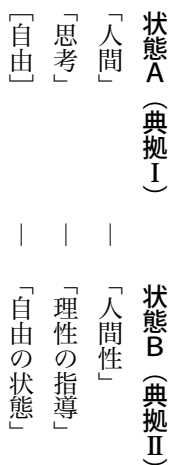
特に最後に挙げた対立(「自然の後見」——「自由の状態」)は、カントがAからBへの移行を今日われわれが解放過程と呼ぶ過程として解釈しようとしたことをはつきり示している。

ただし、その場合に解放という語は論文執筆の時点ではまだ存在しなかつた意味で用いられていることを考慮に入れておかなければならない。カール・マルティン・グラスとラインハルト・コゼレックはこの概念の歴史を記述し、その過程で概念内容がほとんど逆転されたことを明らかにした。「Emanzipatio」<sup>26</sup>、ラテン語の *emancipare* すなわち、*“e manu capere”* 『手から取り上げる、外へ出す、釈放する、自由にする』はローマ共和国では家父 *pater familias* がその子供を父親の力 *Gewalt* から解放つた行為を表していた。これによって子供は完全に家族から離れ、市民法的意味において自由 *sui iuris* になったのである」

(Grass/Koselleck, 1975, S. 154)<sup>(40)</sup>。語のこの意味は一八世紀末頃までその重要な特徴が維持されていた。その後、法的意味が後退し、これに対して同時に今日の政治的および歴史哲学的意味が現われてきた。一種の標語として新しい概念内容が浸透したのは一八三〇年以降になってからである。だが、この内容の根底にある思想はすでにそれ以前に、しかもグラスとコゼレックが確認したところでは、まずカントによって表明された。「自立への解放」という歴史哲学的次元は、カントが『解放』Emanzipationという語を用いないで一七八四年に『啓蒙』という語を自らの過失による非自立性からの人間の出發と規定した時にはじめて用いられた」(Grass/Koselleck, 1975, S. 163)。従って、カントがその後ほどなくして、すなわち、一七八六年一月に発表された『人間の歴史の憶測的始元』で、この間にEmanzipationと呼ばれることになる歴史哲学的構想を記述したとする見解は十分正当だと思われる。

もしカントが彼のモデルにおいて解放過程を記述しようとしたのであれば、二つの課題を解決しなければならなかったはずである。すなわち、彼は状態Aを解放力の作用場として、状態Bを解放行為の結果として描かなければならなかった。第二の課題については、彼は典拠IIのメルクマール「人間性」、「理性の指導」、「自由の状態」によって納得しうる解決を見出した。だが、第一の課題の解決は、典拠IIにあげられているメルクマール「単なる動物的な被造物の未開性」、「本能の歩行器」、「自

然の後見」によつては全然成功していない。なぜなら、自然と本能に完全に支配されている動物にとつて、所与の連関においてもっとも特徴的なのは自己解放への絶対的無能だからである。解放過程を満足できる仕方では記述することができないのは、状態Aについての陳述を全面的に変える必要があった。典拠Iにおいてカントは実際にこれを行ったのである。ここで描かれている生きものは完全なる「人間」であり、それに応じて「連関しあう諸概念にしたがつて語ることができ、したがつて思考する」ことができ、この生き物には解放行為に必要な自立性が備わっている、と考えることができる。しかし、AとB二つの状態のメルクマールをいま相互に関係づけてみると、次のような図が得られる。



(状態Aのメルクマールで「自由」という語を「」カッコつきで挙げたのは、典拠Iにおいてはこの言葉はなるほど明示的には挙げられていないが、カントにとつて「思考」という概念は自由を含意にしている、同時にそれが意図されていたのは明らかだからである。)

この二列の比較から明らかなように、メルクマールはもはや互いに対立関係にはなく、実際には同じである。しかしこのことは、最初に挙げたアプローチで明確になった難点を解決にすることに よつて、第二のこれに劣らず重要なアプローチが生まれたということである。すなわち、いま、状態Bのメルクマールはすでに状態Aに存在しているのであるから、AからBへの移行を質的進歩として捉えることは不可能なことがわかる。

二つのアプローチのいずれの場合にも、解放運動を解放の本質についての表象に合致するように、つまり、システムAに働く力によつて新種的な性質を特徴とするシステムBが生ずる過程として記述することは不可能だった。もしカントがこうした状況を前にして合理的に行動するとしたら、彼は解放モデルを、と同時に、人類の歴史においてそもそも問題なのは解放であるという考え(表象)をも断念したことだろう。しかし、彼は自分のモデルと解放理念とに固執した。その結果、彼は初期状態Aの記述をそれぞれの論究連関に適合させなければならなかった。すなわち、もし自己解放への能力に説得力を持たせようとするれば、彼はそれを完全に人間的状态として描かなければならなかったし、もし状態Bによつて達成された質的進歩をテーマにするならば、動物的状态として描かなければならなかった。カントがこの矛盾を受け入れたとすれば、彼にとつて合理性よりも高い価値を持ったのは特定の意志、すなわち解放への意志だったと考えざるをえない。

この意志はカントが彼の時間理論を構想したときにすでに働いていたと言えよう。しかしながら、『純粹理性批判』の諸々のテーゼを一貫してこの意志に帰することはけつしてできない。

カントがその主著を仕上げたとき、彼は新時代研究がその開始は一八世紀七〇年代の初頭にあることを種々の生活領域において証明したところのあの時代的世界経験の影響下にあった。この新しい世界経験は、人間とその世界には質的变化への能力があることを教えた。これに相応する洞察を精神的に消化することが容易ではなかったのは、そのときまで指導的だった世界経験が人間と彼の世界の事物とを超時間的秩序の代表として解釈することに固執したからである。歴史理論にとつて新しい経験から決定的な帰結をまず引き出したのはヘルダーで、人間の課題は時代から時代へと異なる性格を取るものであるから、いかなる基準も、究極的には啓蒙主義者たちが要求した絶対理性の基準といえども、人間にとつてすべての時代を通じて拘束的なものではない、と彼は説明した。後年の新時代研究と同じように、ヘルダーは人類の質的变化を記述することだけに限定し、その原因を指摘するという試みを断念した。その時々々の質的に新しい歴史的状态の始元は彼にとつては秘密のままだった。いくつかの兆候が示しているように、その当時、さらには一九世紀全体を通じて、時間、さらには新種的なものの時間的起源を矛盾なく解釈することができたとすれば、歴史の謎

をそのまま承認する覚悟があつた場合に限られた。おそらくこの覚悟をすることができた知識人はそれほど多くはなかつた。例外のひとりかフリードリヒ・ヘルダーリンで、彼は賛歌『ライン川』において書いている。

純粹に生じてきたものは謎だ。歌でさえも

この謎を解くことをほとんど許されていない。なぜなら、おまえははじまつたときのままでありつづけるだろうからだ、たとえどんなに困苦と訓育とが

働きかけようと。つまりは、もつとも多く

力を発揮するのは生まれと、

そして、新たに生まれた者を

照らす光だからだ。

(Holderlin, 1951, Bd. 2, 1, S. 143)<sup>(1)</sup>

いまひとつの例外は、一九世紀末頃にその物語芸術の相当部分を、謎としての時間を感じ取らせるという課題に捧げたテオドーア・フォンターネだつた。

この課題が一九世紀にはほとんど知られなかつたとすれば、その大半は——わたしは以下のような厳しい言葉を用いざるをえないが——カントの『純粹理性批判』が及ぼした幻惑効果のせいだつた。主観的な事物的空間、それゆえ物自体は人間にとつて認識不可能である、とその著書でなされた証明は、なる

ほど認識論の分野で一七七〇年以降にその影響力を発揮する時代的な世界経験の完全に正統な表現だつた。物の理解が新しい洞察によつてふたたび乗り越えられるという風にして物を把握することは人間に不可能であることが明らかになつた。もしカントがこの実態を明らかにするだけで甘んじていたならば、一七七〇年の時代的世界経験を有効ならしめるというまさに認識論の領域においてこそきわめて困難だつた課題の解決は彼のおかげだとする理由だけは今日まで残つたことだろう。しかし、カントはいまひとつ別のことをなし、時間もまた客観的状况に属すのではなく、いかなる場合にも人間によつて生み出されるものであることを証明すべきだと考えた。しかし、この補足的テーゼは、すでに述べたように、経験的実態に対立するばかりでなく、それ自身においても矛盾をきたしている。カントの質的転換のモデルにおける矛盾を洞察するとき、このことを認識することができる。

時間概念は——空間概念と違つて——必然的に始元の表象を伴う。もしいま人間が、カントが要求したように、時間の唯一の生産者だとされるなら、人間が実存する以前に時間は存在しなかつたことになる。したがつて、人類の始元を時間的な事象過程として解釈することは許されない。

われわれはそれを非時間的与件として捉えなければならぬ。だが、人類の始元は時間の始元と一致しなければならぬから、この時間の始元についても同じように、それは非時間的

である必要があるだろう。だが、これは明らかにナンセンスであろう。

カントがこの事態に気づかなかったとは考えられない。にもかかわらず、時間が人間の主観の外には存在しないというテーゼに彼が固執したのは、おそらく、人間が生み出したのではない客観的時間を認めれば、人間を歴史の唯一の主として偽称する可能性が失われてしまうことが彼にはわかっていたからである。しかし、解放への意志がカントにあつてすでに最高の審級となつてしまつていたとすれば、その限りではこれは必然だった。

### 訳注

(1) ここに訳出したのは著者自身が「まえがき」で述べているように、一九七七年に構想された論文草稿(原題: Die Neue Epochenforschung und Kant)である。ファルクは一九八四年にそれまでさまざまな学術雑誌あるいは未発表におわつた論文、講演原稿、書簡など三二編をまとめて、二部構成二巻からなる小論集『潜在的歴史秩序の発見』(Die Entdeckung der potentialgeschichtlichen Ordnung. Kleine Schriften 1956-1984. I Teil: Der Weg zur Komponentanalyse. II Teil: Der Weg zur komponentalen Ordnung in der Geschichte. Frankfurt a. M./Bern/New York 1985)を出版した。本論文はその第二部第一巻「歴史における構成素的秩序への道」に収録されている第七番目の論文である。それぞれの論文は小論集収録にあつて著者自身による「まえがき」が付され、「(1)」で当該の論文の成立、要旨について簡単な報告が

なされている。われわれの論文に付されたこの「まえがき」には正確には『新時代研究とカント』のための「まえがき」との表題が付されている。

(2) 注(1)参照。

(3) ファクターXとは、ファルク自身が本文中で問題にしているように、歴史において時代的な質的転換をもたらす原因のことである。

(4) KUHN, Thomas S. (1922-1996) アメリカの科学史家・科学哲学者。その著書『科学革命の構造』(The structure of scientific revolutions: ドイツ語版 Die Struktur wissenschaftlicher Revolutionen. — Frankfurt/M. 1967)において有名なパラダイム理論を展開した。

(5) FOUCAULT, Michel (1926-1984) フランスの哲学者。『狂気の歴史』(1961)、『言葉と物』(1966)、『知の考古学』(1969)、『監獄の歴史』(1975) など多数の著書を著す。

(6) NITSCHKE, August ドイツの中世史学者。ファルクはその文学分析の方法である構成素分析とこの方法に基づく潜在的歴史理論を展開するに当たつて、「ニチュケの研究成果を受容し、かれとの学問的親交を深めたが、本論文で問題になっている「ファクターX」の同定の問題をめぐつてその考えを異にしている『中世における自然認識と政治行動』(Naturerkenntnis und politisches Handeln im Mittelalter. Körper — Bewegung — Raum. — Stuttgart 1967.) 以外に『自然認識と社会』(Naturerkenntnis und Gesellschaft. — In: Bild der Wissenschaft, Heft 5, 1970, S. 442-449)、『自然科学的革命と社会構造の転換』(Naturwissenschaftliche Revolution und Wandel der Gesellschaftsstruktur. — In: Sudhoffs Archiv. Zeitschrift für Wissenschaftsgeschichte, 53, 1970, S. 338-361)、『芸術と行動』(Kunst und Verhalten. Analoge Konfigurationen. — Stuttgart-Bad Cannstatt 1975)、『産業革命における行動の転換』(Verhaltenswandel

- in der Industriellen Revolution. Beiträge zur Sozialgeschichte. — Stuttgart 1975) など多数がある。
- (7) FALK, Walter, 1976: 『構造主義から潜在主義へ——歴史理論および文学理論のための試論』 Vom Strukturalismus zum Potentialismus. Ein Versuch zur Geschichts- und Literaturtheorie. — Freiburg i. Br. und München 1976.
- (8) 注(2) 参照。
- (9) KUHN, Thomas: Boston Studies in the Philosophy of Science 8, ed. R.C. Buck/R.S. Cohen. — Dordrecht-Holland. 1971. ノートルクの引用は DIEDERICH, Warner (Hrsg.), 1974: Theorien der Wissenschaftsgeschichte. Beiträge zur diachronen Wissenschaftstheorie. — Frankfurt/M. 1974, S. 120-165 に収録されたデュヘン語訳による。
- (10) STEGMÜLLER, Wolfgang (1923-1991) ノートルクの哲学者。ドイツにおける分析哲学と科学理論の普及に貢献し、科学理論的構造主義として重要な論文を発表する。分析哲学会 Gesellschaft für Analytische Philosophie は彼の名にちなんでヴォルフガング・シムトクシヨロー賞を一九九四年から設けている。
- (11) STEGMÜLLER, Wolfgang, 1974: Theoriendynamik und logisches Verständnis. — In: Diederich, 1974, S. 167-209. (注(9) 参照)
- (12) KUHN, Thomas S., 1977: Die Entstehung des Neuen. Studien zu Struktur der Wissenschaftsgeschichte. — Frankfurt/M. 1977. ノートルクの引用は Taschenbuchausgabe Frankfurt/M. 1978 による。
- (13) FOUCAULT, Michel: Les mots et les choses. — Paris 1966. (Deutsch: Die Ordnung der Dinge. Eine Archäologie der Humanwissenschaften. — Frankfurt/M. 1971).
- (14) フーローは以下のように書くところ。「……」フランスでは小利口な『解説者』がわたしに構造主義者というレッテルを貼るべきで
- 貼らうとしている。彼らの「……」頭に、わたしが構造分析を特徴づけるいかなる方法も概念もキーワードも利用しなかったことをわからせようとはできなかった。」
- (15) FOUCAULT, Michel, 1972: L'ordre du discours. — Paris 1972. (ノートルクの引用はデュヘン語版 Die Ordnung des Diskurses. — München 1974 による)
- (16) 注(17) 参照。
- (17) NITSCHE, August, 1967: Naturerkenntnis und politisches Handeln im Mittelalter. Körper — Bewegung — Raum. — Stuttgart 1967.
- (18) FALK, Walter, 1974: Das Nibelungenlied in seiner Epoche. Revision eines romantischen Mythos. — Heidelberg 1974.
- (19) STÜRNER, Wolfgang (1940- ) ニュートン・ニュートン大学デュヘン中世・近代史教授と歴史研究所歴史基礎学部門主任。
- (20) STÜRNER, Wolfgang, 1975: Natur und Gesellschaft im Denken des Hoch- und Spätmittelalters. Naturwissenschaftliche Kraftvorstellungen und die Motivierung politischen Handelns in Texten des 12. bis 14. Jahrhunderts. — Stuttgart 1975.
- (21) BURKHARDT, Johannes, 1974: Das Verhaltensleitbild „Produktivität“ und seine historisch-anthropologische Voraussetzung. — In: Saeculum XXV 11974), S. 277-281. DERS., 1975a: Der Umbruch der ökonomischen Theorie. — In: Nietzsche, 1975b (注(20) 参照), S. 57-72.
- (22) KOCH, Siegfried, 1975: Der Konzeptwandel in Naturwissenschaften um 1800 im Vergleich. — In: Nietzsche, 1975b (注(20) 参照), S. 92-196.
- (23) LEPENIES, Wolf, 1976: Das Ende der Naturgeschichte. Wandel kultureller Selbstverständlichkeiten in den Wissenschaften des 18.

- und 19. Jahrhunderts: — München/Wien 1976.
- (24) FALK, Walter, 1976: Vom Strukturalismus zum Potentialismus. Ein Versuch zur Geschichts- und Literaturtheorie. — Freiburg i. Br. und München 1976.
- (25) FOUCAULT, Michel, 1975: Surveiller et punir: La naissance de la prison. — Paris 1975. (フアルクの引用はドイツ語ポケット版 *Überwachen und Strafen. Die Geburt des Gefängnisses.* — Frankfurt/M. 1977 (トモダチ) 邦訳では主題と副題が逆で、『監獄の誕生 — 監視と処罰』(新潮社、一九七七年) となっている。)
- (26) NITSCHKE, August (Hrsg.), 1975b: Verhaltenswandel in der Industrielten Revolution. Beiträge zur Sozialgeschichte. — Stuttgart 1975.
- (27) BURKHARDT, Johannes, 1975b: Vom Handlungstheater zum modernen Stimmungsprinzip. — In: Nitschke, 1975b (注(26)参照), S. 49-56
- (28) FISCHER, Gertrud, 1975: Individuum und Gesellschaft in der französischen Komödie. — In: Nitschke, 1975b (注(26)参照), S. 32-40.
- (29) FALK, Walter, 1975: Der epochengeschichtliche Wandel beim frühen Goethe. — In: Nitschke, 1975b (注(26)参照), S. 41-48.
- (30) EICHBURG, Henning, 1975a: Ökonomische Faktoren der Industrielten Revolution. — In: Nitschke, 1975b (注(26)参照), S. 9-20. DERS., 1975b: Der Umbruch des Bewegungsverhaltens. Leibesübungen, Spiele und Tänze in der Industrielten Revolution. — In: Nitschke, 1975b (注(26)参照), S. 118-135.
- (31) 注(24)参照。
- (32) KOSELLECK, Reinhart (1923-2006) ユーラントネルナ大学歴史学教授。二〇世紀のドイツにも有名なトマン歴史理論家のひとり。『カール・シャットニットの影響を強く受けたその学位論文『批判と危機』Kritik und Krise (1954) についてなる。』
- (33) BOSSUET, Jacques Bénigne (1627-1704) フランスのカトリック司教にして神学者、プロテスタントとの論争で主役を演ずる。ルイ十四世の王太子の教育用に書いた『世界史論』(1681) は、『世界史は神の摂理に貫かれているとする摂理史観の代表作である。(『哲学・思想辞典』岩波書店より抜粋)
- (34) KANT, Immanuel, 1956: Kritik der reinen Vernunft. — In: ders.: Werke in sechs Bänden. Hrsg. v. Wilhelm Weischedel. Bd. II. — Darmstadt 1956. 漢数字は『カント全集』第四五巻、『純粹理性批判』上、二〇〇一年、『純粹理性批判』下、二〇〇三年(岩波書店)(有福孝岳訳)のうち、第四巻の該当頁を指す、二つでは上記邦訳書の訳文を借用させていただいた。以下同様。
- (35) フアルクはこの著書の表題を二つでは『人間の歴史の始元についての諸々の憶測』Mutmaßungen über den Anfang der Menschengeschichteと二つでは、本文126(96)頁の記述に見られるように、正しくは『人間の歴史の憶測的始元』Mutmaslicher Anfang der Menschengeschichteとある。
- (36) HERDER, Johann Gottfried: Ideen zu einer Philosophie der Geschichte der Menschheit.
- (37) FALK, Walter, 1976: Vom Strukturalismus zum Potentialismus. Ein Versuch zur Geschichts- und Literaturtheorie. — Freiburg i. Br. und München 1976.
- (38) NORRHOFEN, Eckhard, 1977: Sierkampf und Epochenwandel. — In: Frankfurtur Allgemeine Zeitung, 11. Januar 1977, S. 19.
- (39) KANT, Immanuel, 1964: Mutmaßlicher Anfang der Menschengeschichte. — In: ders.: Schriften zur Anthropologie, Geschichtsphilosophie, Politik und Pädagogik. — Darmstadt 1964, S. 83-102.



なお、漢数字は『カント全集』第十四卷、『歴史哲学論集』、岩波書店、二〇〇〇年）所収の「人間の歴史の憶測的始元」（望月俊孝訳）の頁数を指す。なお、ここでは上記邦訳書の訳文を（必要に応じて一部字句などの修正のうえ）借用させていただいた。以下同様。

(40) GRASS, Karl Martin/KOSELLECK, Reinhart, 1975: Emanzipation. — In: Koselleck, 1975a.: Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland. Bd. 2 — Stuttgart 1975.

(41) HÖLDERLIN, Friedrich: Sämtliche Werke, hrsg. von Friedrich Beißner, Bd. 2, Teil 1. — Stuttgart 1951 (Große Stuttgarter Ausgabe). 以下では『ホルダーリン全集』第2巻（一九七三年（昭和四八年）、河出書房新社、一八七頁以下）所収の浅井真勇訳を（一部字句の修正をして）借用させていただいた。

（二〇〇六年四月二九日）